小・中学校におけるカリキュラム・マネジメント推進に関する研究（第二年次）

―研究協力校におけるカリキュラム・マネジメントの支援―

調査研究チーム

《研究の要旨》

本研究では，新しい時代に求められる資質･能力を育むカリキュラム・マネジメントの実現に焦点を当てた。第二年次である今年度は，管理職等のリーダーシップで進める組織としてのカリキュラム・マネジメント（「大きなカリ・マネ」）だけでなく，教職員一人一人が，学級経営や教科指導を基軸として進めるカリキュラム・マネジメント（「小さなカリ・マネ」）を推進することに重きを置いて研究を進めた。学校の重点目標達成という目的の下，この２つのカリキュラム・マネジメントを相互に作用させることで，教育活動の質が向上することが明らかになった。

Ⅰ　研究の趣旨

小学校（中学校）学習指導要領には，よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し，それぞれの学校において，必要な学習内容をどのように学び，どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら，社会との連携及び協働によりその実現を図っていくことの重要性が示された。つまり,「社会に開かれた教育課程」を実現するためには，児童・生徒に必要な資質・能力を明らかにし，それを学校と社会が連携及び協働しながら育成していくことの重要性が示された。

さらに，同解説総則編では，カリキュラム・マネジメントとは学校教育に関わる様々な取組を，教育課程を中心に据えながら組織的かつ計画的に実施し，教育活動の質の向上につなげていくことであるとし，以下の三つの側面から整理している。

○児童（生徒）や学校，地域の実態を適切に把握し，教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと。

○教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。

○教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと。

以上のことから，本チームでは，学校として育成を目指す資質・能力を明確にし，教育活動の質的向上を図るカリキュラム･マネジメント推進の在り方を探っていくこととする。カリキュラム・マネジメントを通して学校教育の改善・充実の好循環を生み出し，本県の児童・生徒に必要な資質・能力を育成していきたいと考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究の内容

１　第一年次の取組

第一年次は研究協力校（以下，協力校）２校において，カリキュラム・マネジメントについての校内研修と,「資質・能力の育成を目指すカリキュラム・マネジメント」の戦略の提案を行った（**図１**）。

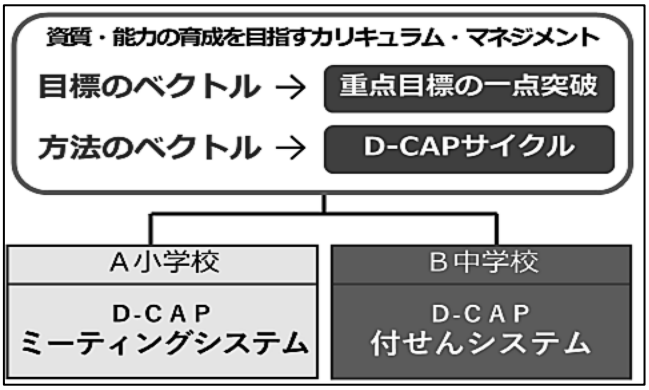


図１　センター提案戦略

この戦略のポイントは二つである。

○目標のベクトルをそろえる【重点目標の一点突破】

教育目標の中から，重点的に育成を目指す資質・能力を明らかにし，目標のベクトルをそろえることで，重点目標の達成という一点突破で進めていく。

○方法のベクトルをそろえる【Ｄ－ＣＡＰサイクル】

マネジメント・サイクルを効率的・効果的に機能させる「Ｄ－ＣＡＰサイクル」を推進し，教職員が同じ方法で組織的に進めていく。

本チームの提案する「Ｄ－ＣＡＰサイクル」とは，教育活動（Do）後の評価（Check），改善（Action），計画（Plan）を１セットのＣＡＰと捉えたマネジメント・サイクルである。ＣＡＰを１セットとして行うことで，見直し・改善のスピードを上げ，マネジメント・サイクルがより効率的に機能するようにした。これまでは，教育活動後の評価や改善を学期末や年度末に行うことが多く，記憶が曖昧になったり，反省が次年度の計画に生かされなかったりすることがあった。「Ｄ－ＣＡＰサイクル」は，これらの課題の解決につながるものである（**図２**）。

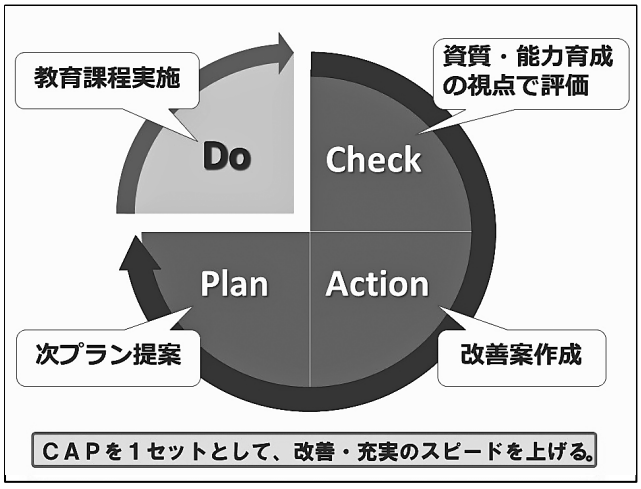


図２　「Ｄ－ＣＡＰサイクル」

この「Ｄ－ＣＡＰサイクル」を，放課後に教職員の共通の時間を確保しやすい小学校では「Ｄ－ＣＡＰミーティングシステム」,空き時間に個人で作業を進めやすい中学校では「Ｄ－ＣＡＰ付せんシステム」として協力校に提案した。

２　研究の目的

本研究の目的を以下のように設定した。

○協力校のカリキュラム・マネジメントの取組を支援することで，教職員一人一人が学校の重点目標の達成をより自分事として意識して進められるようにする。
○協力校での２年間の実践を発信することで，教育活動の質的向上を図るカリキュラム・マネジメント推進の在り方を県内に広める。

３　研究の内容

(1)「大きなカリ・マネ」から「小さなカリ・マネ」へ

第一年次は,管理職や教務主任のリーダーシップの下，組織として「Ｄ－ＣＡＰサイクル」を回すことで，学校の重点目標達成に向けたカリキュラム・マネジメントを推進してきた。これを「大きなカリ・マネ」と捉える。

第二年次である今年度は，教職員一人一人が学校の重点目標を踏まえた上で，学級経営や教科指導を基軸とした「Ｄ－ＣＡＰサイクル」を回していくことで，教職員一人一人がカリキュラム・マネジメントを進めていくこととした。これにより，教職員が学校の重点目標を自分事と捉え，一人一人の主体性を生かしていくことができると考える。この取組を「小さなカリ・マネ」と捉える。

第二年次は，個人ごとに「小さなカリ・マネ」を進めていくことで，組織としての「大きなカリ・マネ」が推進されていく姿を目指して，協力校で実践を進める（**図３**）。

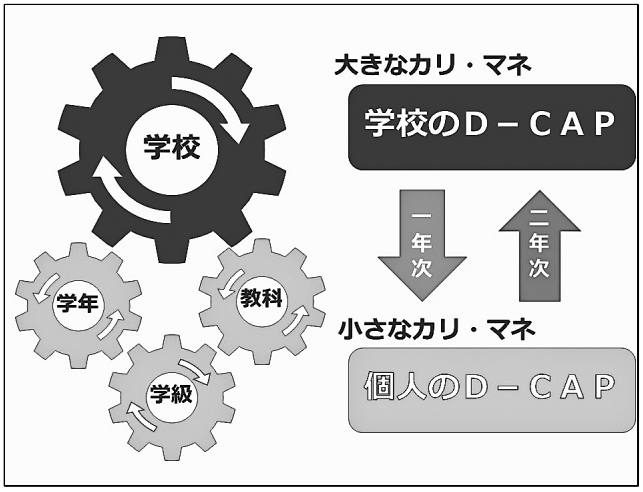


図３　「大きなカリ・マネ」から「小さなカリ・マネ」へ

(2) リーフレットの作成・発信

協力校でのカリキュラム・マネジメント推進の実践を基に，多くの学校で活用可能な汎用的事例として，カリキュラム・マネジメントのリーフレットを作成し，県内公立学校に配布する。

Ⅲ　研究の実際

１　協力校での実践

(1) Ａ小学校の実践

Ａ小学校の重点目標は,「心も体もたくましい子どもの育成」である。この目標に向かって「Ｄ－ＣＡＰミーティングシステム」という方法でカリキュラム・マネジメントを進めた。「Ｄ－ＣＡＰミーティングシステム」は，放課後等の時間を利用しミーティングで評価，改善，計画するシステムである。短期間で行事を評価，改善，計画する「Shortプラン」と，教職員を「知」「徳」「体」の三つの部会に分け，長期的に教育活動を評価，改善，計画する「Longプラン」を実践してきた（**図４**）。

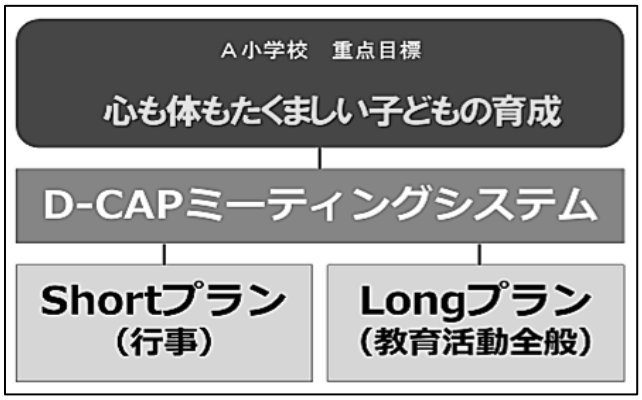
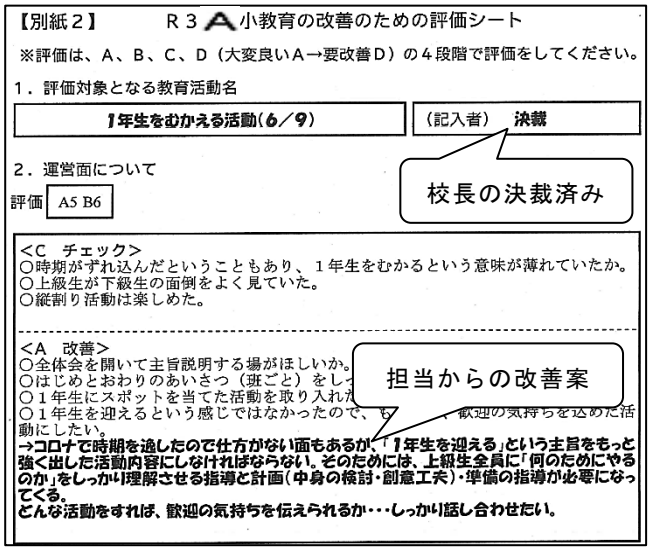


図４　「Ｄ－ＣＡＰミーティングシステム」

①　「Shortプラン」の取組

「Shortプラン」は，学校行事の振り返りを目的として行った。

図５は，１年生を迎える活動後に行ったＤ－ＣＡＰの結果である。各職員が記入した「評価シート」を担当が集約し，即座に改善案を提案していく。その後すぐに，校長決裁を受け，次年度の計画として教職員に周知する。


【別紙２】　　Ｒ３ A 小教育の改善のための評価シート

※評価は、A、B、C、D（大変良いA→要改善D）の４段階で評価をしてください。

１．評価対象となる教育活動名

１年生をむかえる活動(6／9)　（記入者）　決裁

校長の決裁済み

２．運営面について

評価　A5 B6

<C　チェック>
○時期がずれ込んだということもあり、１年生をむかるという意味が薄れていたか。
○上級生が下級生の面倒をよく見ていた。
○縦割り活動は楽しめた。

<A　改善>
○全体会を開いて主旨説明する場がほしいか。
○はじめとおわりのあいさつ（班ごと）をし
○１年生にスポットを当てた活動を取り入れた
○１年生を迎えるという感じではなかったので、も　歓迎の気持ちを込めた活動にしたい。
→コロナで時期を逸したので仕方がない面もあるが、「１年生を迎える」という主旨をもっと強く出した活動内容にしなければならない。そのためには、上級生全員に「何のためにやるのか」をしっかり理解させる指導と計画（中身の検討・創意工夫）・準備の指導が必要になってくる。
どんな活動をすれば、歓迎の気持ちを伝えられるか・・・しっかり話し合わせたい。

担当からの改善案

図５　決裁後に周知された「評価シート」

各教師が学校行事を「評価シート」で評価を行う【Ｃ】。その後すぐに担当者が分析して，改善案を提示する【Ａ】。改善案は校長決裁を受け，次年度の計画につなげる【Ｐ】。このように，ＣＡＰをまとめて行った。

「Shortプラン」の取組により，これまで学期末や年度末に行っていた行事反省が不要となり，業務の負担軽減につながった。また，次年度の計画を立案することで，今年度の反省が確実に反映され，改善につながった。昨年度からこの取組を継続して行ってきたことで，日常的な取組として定着してきている。

②　「Longプラン」の取組

「Longプラン」は教育活動を評価，改善し，次年度の計画につなげることを目的として行った。

ア　学級のカリ・マネ

今年度は，教育活動の評価，改善，計画を，学級担任一人一人が学級経営を基軸として行うこととした（学級のカリ・マネ）。この学級のカリ・マネを「小さなカリ・マネ」と捉え，個人で「Ｄ－ＣＡＰサイクル」を回すことで「Longプラン」を推進した（**図６**）。

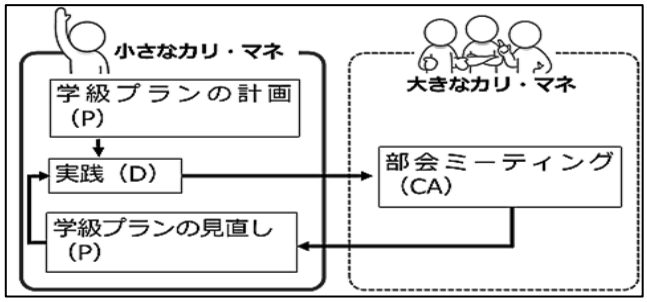
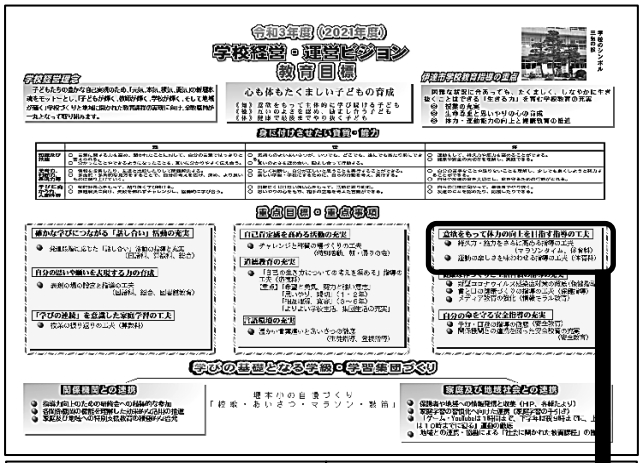


図６　学級のカリ・マネ

４月に全体ミーティングを行い，学校経営・運営ビジョンの中にある育てたい資質・能力やその育成の手立てである重点事項を全体で確認した。例えば５年生では，「体」の重点事項である「持久力・筋力をさらに高める指導の工夫」を受け，自分の学級の実態に合わせ，「全員が一年間で42.195㎞を完走できるように，短いスパンで目標を立て，達成感を味わえるようにする」と具体化した「学級プラン」を作成し，実践した（**図７**）。



学校の重点項目		学級での取組【D】
体	<体育科> ○マラソンタイムの 取り組みを充実させる工夫 ○楽しく運動に取り組ませる指導の工夫 ○達成感を味わわせる工夫	・　１２人全員が42.195㎞を完走できるように，短いスパンで目標を立て，達成感を味わえるようにする。
	<保健指導> ○新型コロナウイルス感染症予防の習慣化 ○むし歯・歯肉炎予防の歯磨きの仕方の徹底	・　新型コロナウイルス感染症を予防するために，「うがい・手洗い・マスク・消毒・換気　３密回避」を当たり前にできるように，絵カード等の掲示物で見える化を図る。
	<情報モラル教育> ○家庭や関係機関との連携強化	
	<安全教育> ○体験的に学ばせる工夫 ○学ばせたいことの 的を絞った訓練	

図７　「学級プラン」作成の流れ

また，２学期に行ったミーティングでは，部会後の共有の場面で，６年生の「あいさつカード」の実践が報告された。この「あいさつカード」は，元々は５年生が実践していたもので，１学期のミーティングの際に全体で共有されたものを，６年生の担任が自分の学級にアレンジして取り入れていた。一つの学級での取組が学校全体で共有され，他の学級へと広がっていった。これは，「小さなカリ・マネ」が「大きなカリ・マネ」に作用し，他の「小さなカリ・マネ」へとつながっていく，言わば，個と組織が相互に作用する姿であると考える。

これらを整理すると，以下の流れとなる。

【Ｐ】学校経営・運営ビジョンの重点事項の中から，学級で取り組むものを選択し，「学級プラン」を決定
↓
【Ｄ】「学級プラン」の実践
↓
【ＣＡ】部会ミーティングで各学級の取組を共有
↓
【Ｐ】「学級プラン」を見直し，実践内容を決定

イ　校長の即時決裁

１学期に行ったミーティングでは,「体」部会から,「マラソン練習の際に,「時間より早く来ている意欲的な児童がいるが，開始時間をそろえているため，待ち時間が増え,意欲を削ぐことになっている」という反省があった。「意欲が持続できるように,なるべく早めに開始したい」という改善案が提案された。その後，校長から,「時間前から来ている児童たちのやる気の高さは，去年１年間の取組の成果だと思う。そのような児童のやる気を生かしてあげる，そして，やる気を次の頑張りにつないでいけるようにしたい。児童が校庭に出てきたら,（一斉でなくても）走らせるようにしていいと思います」とあり，改善案を即時決裁した。教職員の評価，改善，計画が素早く実践されている姿が見られた（**図８**）。

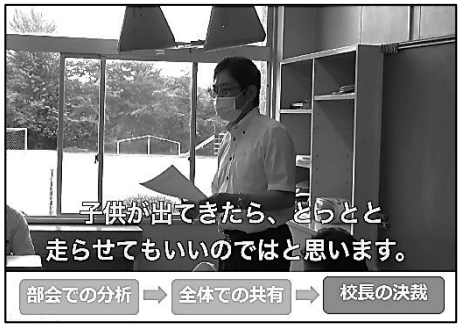


図８　校長による即時決裁

③　教育課程編成に向けて

ア　評価規準の作成

第一年次は，学校で育成を目指す資質・能力の評価規準を校長が作成し，方向性を示した。第二年次は，この評価規準を教職員で見直し，目指す児童像を共有できるようにした。

12月に行われたミーティングでは，これまでの話合いの内容や児童の意識調査の結果を基に,「知」「徳」「体」それぞれの部会で，次年度に育成を目指す資質・能力の評価規準を考えた（**図９**）。

令和4年度

心も体もたくましく、しなやかな子どもの育成

身に付けさせたい資質・能力

	知	徳	体
知識及び技能	○自分の考えを、学んだことや教科の言葉等を使って、話したり、伝えたりできる。 ○基礎的・基本的な内容をしっかり身に付けている。	○気持ちのよいあいさつや返事が当たり前にできる。 ○人前で堂々と話すことができる。 ○自分のよさや友達のよさを見つけることができる。	○筋・全身持久力を高める運動の仕方が分かり、運動に取り組む。 ○健康や命を守る行動の仕方が分かり、行動する。
思考力、判断力、表現力等	○情報を収集・選択・活用して問題を解決することができる。 ○自分の考えや友達と話し合ったことを、様々な方法で、分かりやすく発信できる。	○よりよい判断をし、自信をもって進んで実行できる。 ○よりよい学校・学級生活を送るための話し合いを通して、互いにできることを考え、実行する。	○自分に合った運動を選び、そのやり方を工夫し、実践する。 ○自分や友達の命を守るために学んだことを、日常生活で生かすことができる。
学びに向かう力、人間性等	○課題解決に向かって、最後までねばり強く学び続けることができる。 ○友達や自分の見方・考え方のよさや違いを認めながら、学び合うことができる。	○何事にも進んでチャレンジし、あきらめずにやり遂げることができる。 ○相手の立場や気持ちを考え、思いやりの心をもって接することができる。	○より高い目標に向かって進んで挑戦し、最後までやり抜く。 ○互いのよい動きやがんばりを認め、励まし合って運動する。 ○様々な運動に楽しく取り組む。

図９　見直し後の評価規準表

全教職員で目指す児童像を共有することで，目標のベクトルをそろえることができ，教職員一人一人が重点目標を自分事として捉えようとする姿が見られた。

イ　学校経営・運営ビジョンの作成

１月のミーティングでは，作成された評価規準を基に学校経営・運営ビジョンの重点目標・重点事項の検討を行った。今年度は，重点目標を検討していく際に，より具体化した内容にしていくことをポイントとした。これにより，実践事項として取り組む内容や，重点目標の達成のために，どの場面で，どのような指導や教育活動を行うのか，より明確にすることができ，評価がしやすくなった（**図10**）。

ビジョン「重点目標・重点事項」

体

□ 筋・全身持久力を高めるための運動の仕方を身に付けさせる。

○ 運動タイム（仮）の充実（マラソン、サーキットトレーニング等）
○ 児童の実態に応じた運動の工夫（体育）

□ 課題に合った運動を選び、取り組むことができるようにする。

○ 課題を見つける場の設定（体育、特別活動、朝・帰りの会）
○ 様々な運動で、児童の実態に応じた場の工夫（体育）

□ 児童が決めた目標を達成できるようにする。
□ 児童同士で頑張りを認め、励まし合うことができるようにする。

○ 児童の頑張りの視覚化（特別活動、創意）
○ 称賛の場の設定（特別活動、創意）
○ 学習カードの工夫（体育、創意）
○

□ 健康や命を守る行動の仕方を身に付けさせる。

○ 安全教育の充実（安全教育）
○ 行事の事前、事後指導の徹底（安全教育）
○ 健康づくりの指導の工夫（保健指導、学級活動、食育）

□ 健康や命を守るために学んだことを日常生活に生かすことができるようにする。

○ 月のめあての反省の場の設定（朝・帰りの会）
○ 家庭との連携の強化（健康チェックカード、お便り）
○ メディア教育の強化（情報モラル教育）

図10　重点目標・重点事項の案

(2)　Ｂ中学校の実践

Ｂ中学校の重点目標は,「自ら考え，自ら判断し，責任をもって行動する力」である。この目標に向かって「Ｄ－ＣＡＰ付せんシステム」という方法でカリキュラム・マネジメントを進めた。「Ｄ－ＣＡＰ付せんシステム」は，付箋紙を使って評価，改善，計画するシステムである。行事を評価，改善，計画する「行事プラン」と，授業研究会を中心に，日々の教科指導を評価，改善，計画する「授業プラン」を実践してきた（**図11**）。

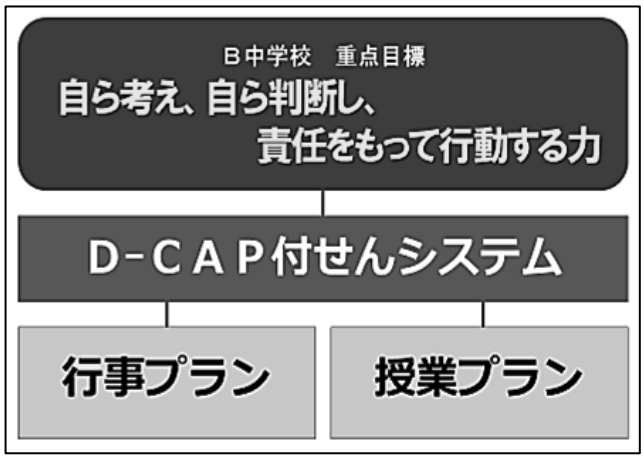


図11　「Ｄ－ＣＡＰ付せんシステム」

「Ｄ－ＣＡＰ付せんシステム」では，色分けした付箋紙を活用して，行事や授業の反省を内容面だけでなく，資質・能力の育成という視点に重点を置いて行った。青色の付箋紙には生徒のよい姿やその要因となった手立てを記入し，赤色の付箋紙には改善が必要な点，そして，黄色の付箋紙には分析後の意見や改善策を記入した(図12)。

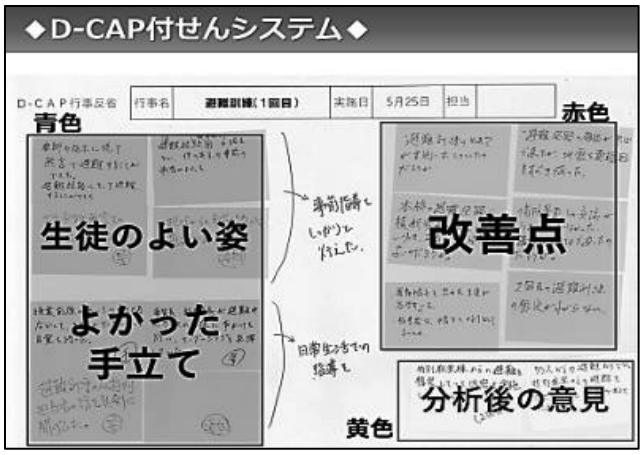


図12　付箋紙の使い方

① 「行事プラン」の取組

「行事プラン」は，各種行事（学校・学年・生徒会）の振り返りを目的として行った。

第二年次は，昨年度の行事のＤ－ＣＡＰの記録を生かして行事計画を立てていくことと，生徒たちに任せる場面をさらに増やしていくことの２点を重点として進めることとした。

例えば，文化祭に向け，職員会議で昨年度のＤ－ＣＡＰによる振り返りを共有し,より生徒が中心となるよう，今年度の方向性について共通理解を図った（図13)。

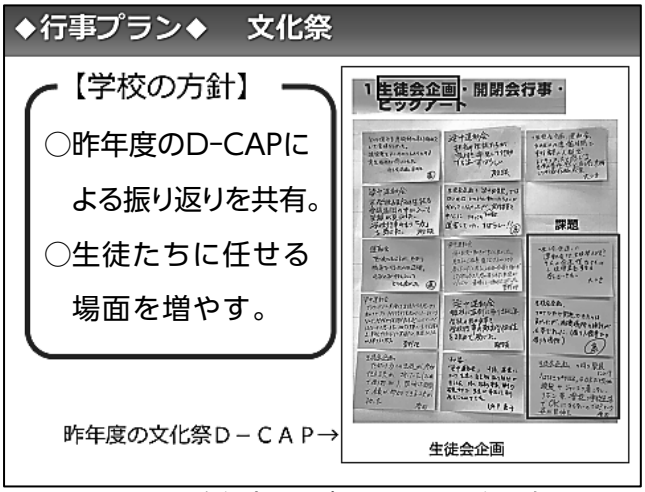


図13　昨年度の行事Ｄ－ＣＡＰを共有

「行事プラン」では，行事を実施し，目指す資質・能力の視点から気付いたことを付箋紙に記入し，評価を共有する【Ｃ】。その後，担当者が分析し，改善案を提案する【Ａ】。改善案の記録を保管し，次年度の計画作成へつないでいく【Ｐ】。

文化祭後のＤ－ＣＡＰでは，「生徒たちが主体的に活動できた」「積極的な姿が見られた」という評価が多くあった。また「開会式・閉会式ともに生徒に司会・進行の流れを一から考えさせ，実行させるべきであった」という課題もあった。自ら考え，自ら判断し，責任をもって行動する生徒を育てたいという思いが，教職員により意識されてきたことが分かった。

② 「授業プラン（教科のカリ・マネ)」の取組

「授業プラン」は，教科指導を実施，評価し，授業改善につなげることを目的として行った。

今年度は，一人一人が学校の重点目標を踏まえて教科指導を基軸として評価，改善，計画を行うこととした（教科のカリ・マネ)。この教科のカリ・マネを「小さなカリ・マネ」と捉え，個人で「Ｄ－ＣＡＰサイクル」を回すことで「授業プラン」を推進した（図14)。

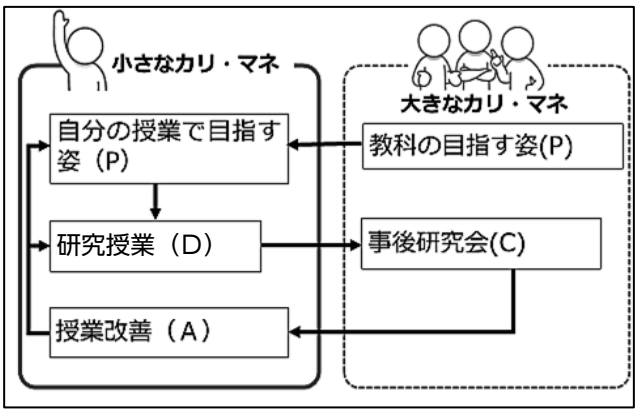


図14　教科のカリ・マネ

ア　教科として目指す姿

まず教科部会で学校の重点目標を基に，それぞれの教科で目指す「自ら考え，自ら判断し，責任をもって行動する生徒の姿」のイメージを具体化した（図15)。

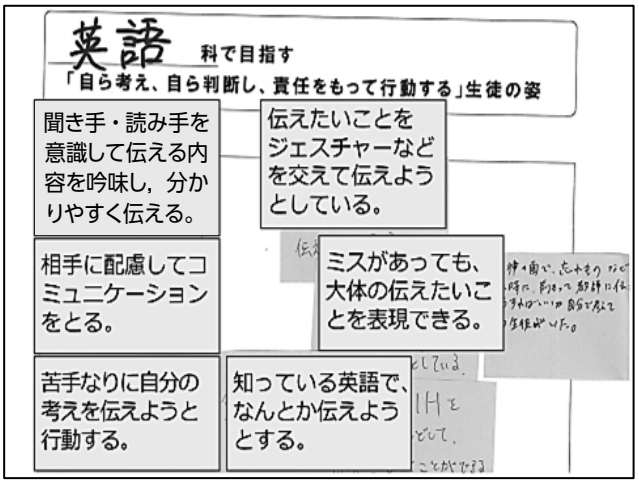


図15　教科で目指す生徒の姿

これにより，目指す姿の達成のために，具体的にどのような指導をしていくのかが明確になった。

イ　授業で目指す姿

教科で目指す姿を受け，個人ごとに「授業で目指す生徒の姿」と「その姿を達成するための手立て」を決定し，それらを指導案に明記した。授業研究会の際，参観者は目指す生徒の姿に沿って付箋紙に記入した。目指す生徒の姿が明らかとなったことにより，教科が異なる場合でも，教職員が同じ視点で授業を参観することができた。

例えば，英語の授業では，「相手意識をもち，伝える内容を判断して表現する生徒」を目指し，ＡＬＴに自分のヒーローを紹介する場面で，四つの工夫を取り入れていた。一つ目として，ＡＬＴからの動画メッセージを見せ，誰に向けて紹介をするのかという相手意識を明確にもたせた。二つ目は，相手が知りたいことをどのように伝えればよいかを考えさせ，伝える内容を具体化した。三つ目は，ＡＬＴが知りたいことを整理し，表現の視点を明確にした。四つ目は，内容の不足したスピーチを見せることで，伝えなければならないことの気付きを促した。このように，生徒たちに何を伝えればよいかを考え，判断できる力を付けたいという，教師の明確な意図が伝わってくる授業を実践していた（図16）。

図16　目指す生徒の姿を達成するための授業の工夫

ウ　事後研究会

事後研究会も授業で目指す姿が達成できたかどうかという視点で話し合われた。授業者の自評の中に「本時は，カリ・マネを意識し，目指す生徒像を明確にして，それに合うような授業の展開を考えた」という言葉があり，一人一人の意識がカリキュラム・マネジメントや資質・能力の育成に向いていることが伝わってきた。

エ　目指す姿の見直し

授業実践や改善を繰り返していく中で，目指す姿に近付いていく生徒の変容が見られた。そして，その変容に合わせて目指す生徒の姿も適宜見直されていった。

英語の授業では，５月に設定した二つの目指す姿のうち「相手意識をもち，伝える内容を判断して表現する生徒」を優先して指導に取り組んでいた。その後も，指導を続けたことにより，生徒の振り返りカードには，「自己紹介で得意なことを伝えるときには，good　at～ingやlike～ing，enjoy～ingと伝えると分かりやすいことが分かりました」という反省が見られた。相手意識をもって伝えようとする，目指す姿に近付いていることが分かる（図17）。

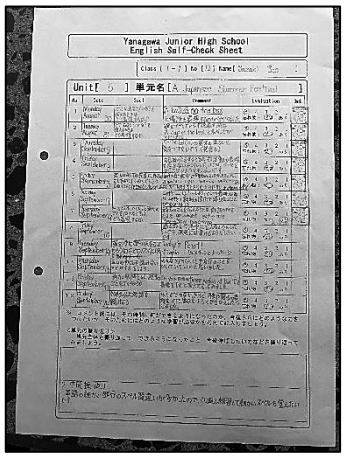


図17　振り返りカード

目指す姿が達成されてきたことで，９月には，育てたい姿を，「基本的な表現や技能を身に付けるために，自ら進んで学ぶ生徒」と見直した（図18）。

目指す生徒の姿（５月）

① 相手意識をもち，伝える内容を判断して表現する生徒
- ALT が知りたがっていることを意識した内容を伝えることができているか。

② 級友の表現のよさを尊重し，取り入れながら，自分の考えをよりよいものに変化させる生徒
- 相手の表現のよさを尊重し，取り入れることで，自分の考えをよりよいものにするための工夫をして相手に伝えることができているか。

目指す生徒の姿（９月）

① 基本的な表現や技能を身に付けるために，自ら進んで学ぶ生徒
- 自分で決めた目標を達成するために，繰り返し音読に取り組み，英語らしい発音やリズムで話すための基礎や新出表現を身に付けようとすることができているか。

② 相手意識をもち，伝える内容を判断して表現する生徒
- 初対面の相手に自分のよさが伝わるように，話す内容を判断して表現することができているか。

図18　見直された目指す生徒の姿

このように，各教科で学校の重点目標を達成した姿を共有し【Ｐ】，その姿を基に，自分の授業で目指す姿を決定する【Ｐ】。授業研究会を実施【Ｄ】し，付箋紙に評価を記入する【Ｃ】。その後，授業改善につなげる【Ａ】。また，必要に応じて，授業で目指す姿を見直していく【Ｐ】。このような流れで教科のカリ・マネを実施してきた。

こうした実践は他教科でも行われており，日常的な授業改善につながっている。この教科のカリ・マネにより，すべての授業を通して学校の重点目標の達成を目指していくということが，教職員全体で意識されるようになった。

③　ＩＣＴの活用

２学期から「行事プラン」の振り返りがＩＣＴを活用して行われるように改善されていった。行事後すぐに，タブレットのアンケート機能で振り返りを行った。ＩＣＴの活用により，結果が集約しやすくなり，より迅速に評価，改善，計画ができるようになった（**図19**）。

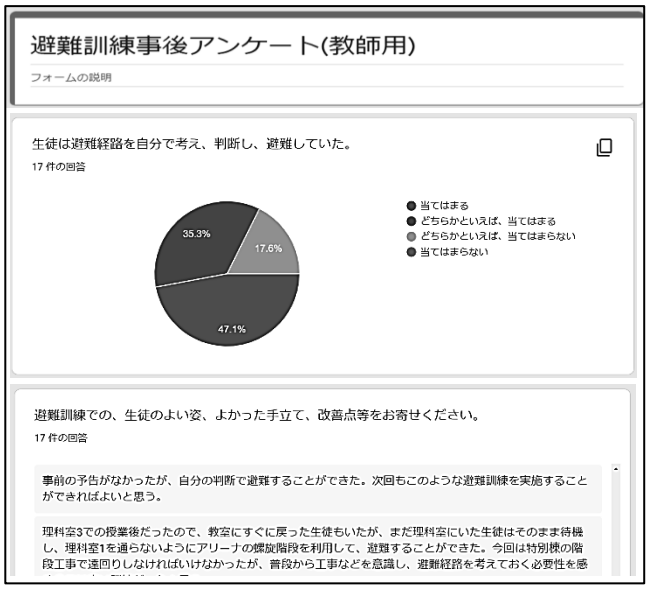


図19　ＩＣＴを活用したＤ－ＣＡＰ

また，新型コロナウイルス感染症対策のために授業研究会をオンラインで配信した際には，目指す姿が達成されたかなどをアンケートフォームに参観者が入力するようにした。付箋紙を使うことなく，意見を集約できるような工夫が見られた。

このように，実態に応じてＤ－ＣＡＰの在り方を工夫・改善しながら，より効率的なカリキュラム・マネジメントに取り組むことができた。

Ⅳ　研究のまとめ

１　研究の成果

(1) カリキュラム・マネジメントの確立

第二年次は，教職員一人一人が学校の重点目標を踏まえ，学級経営や教科指導を基軸とした資質・能力を育む「小さなカリ・マネ」の推進を支援してきた。管理職がリーダーシップを発揮し，組織的に教育活動の改善を図る「大きなカリ・マネ」を「大きな歯車」に例えると，教職員の主体性を生かし，個人で教育活動の改善を図る「小さなカリ・マネ」は複数の「小さな歯車」に例えられる。学校は，これらの「小さな歯車」が回ることによって，教育活動が展開されている。しかし，これまでを振り返ると，これらの「小さな歯車」が，必ずしも学校の重点目標の達成を意識したものになっていたとは言い難い。

本実践の協力校においては，「小さな歯車」としての教職員一人一人が，重点目標達成という目的の下，相互に噛み合い，作用し合うことによって，組織としての「大きな歯車」を動かし，学校全体として教育活動の質の向上を目指す取組が実現した（**図20**）。

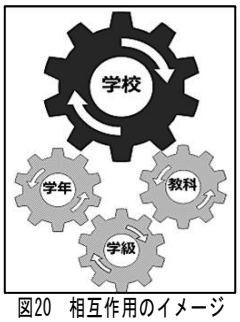


図20　相互作用のイメージ

このように，カリキュラム・マネジメントの確立には，管理職のリーダーシップと，教職員一人一人の主体性に基づくマネジメント・サイクルが，一体的に機能することが必要であることが分かった。

(2) アンケートから

重点目標の達成という目標のベクトルを，全員が共有してきたことで，教職員一人一人が同じ視点で児童・生徒の活動を見取ったり，称賛したりすることができるようになった。

教職員が資質・能力を意識した教育活動を行ったことで，児童・生徒の意識も変わってきている。協力校のＡ小学校で行った児童対象のアンケートでは，今年度重点的に取り組んだ「粘り強さ」や「自分の足りない部分を意識して目標を立てる力」等の向上が示唆される結果となっており，教師が意図して取り組んできたことが，児童にも伝わっていたことが分かる（**図21**）。

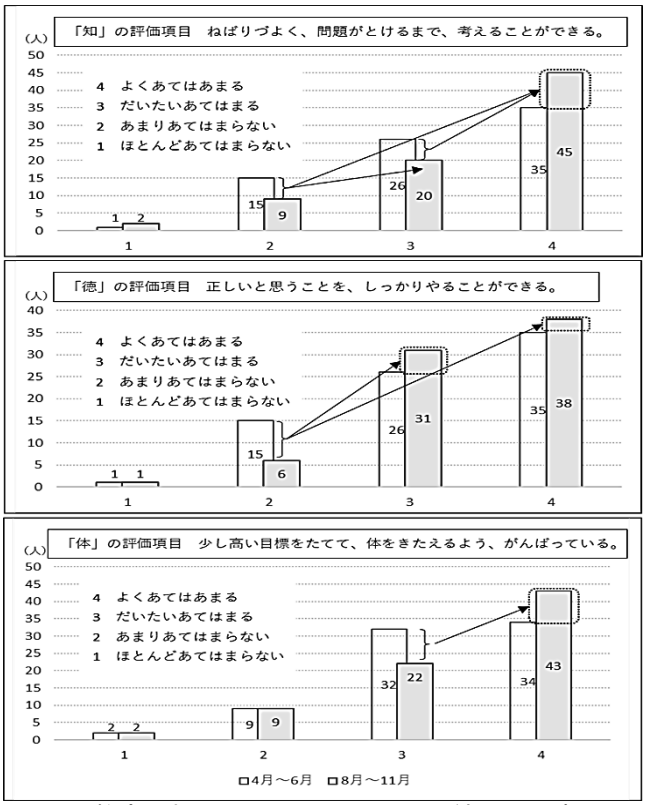


図21　教育目標についてのアンケート結果（児童用）

このように，児童・生徒も学校が育成を目指している資質・能力を意識することができるようになってきている。

(3) リーフレットによる発信

本研究では,Ｄ－ＣＡＰサイクルを回していくことで，教職員一人一人が資質・能力の育成の視点をもちながら教育活動に取り組み，カリキュラム・マネジメントを通して学校教育の改善・充実の好循環を生み出すことができた。そこで，カリキュラム・マネジメント推進の在り方を広く発信するため，協力校での２年間の実践をもとに，「児童生徒の資質・能力を育むカリキュラム・マネジメントＧＵＩＤＥ」を作成した（**図22**）。

図22　カリキュラム・マネジメントのリーフレット

リーフレットでは，カリキュラム・マネジメント推進の四つの提案として，以下の内容を示している。

○みんなで同じ目標に向かって進んでいこう。
○たくさんの意見を交流し，意識を共有していこう。
○一人一人の力を集結し，目標を実現しよう。
○今の取組を，次の教育課程に生かしていこう。

協力校での実践例をもとにしたこれらの提案を，県内公立学校に配布していくとともに,Webサイト等による発信や，当センターにおける研修等での活用も図っていきたい。

(4) 専門性を生かした関わり

本研究においては，養護教諭や事務職員の専門性や校務運営への意識の高さを生かすため，部会等への参加を促してきた。養護教諭が参加した部会においては，保健安全や教育相談的な視点からの情報交換も促進された。また,事務職員が校務運営に係る協議に参加することで，予算を意識した教育計画へとつながった。

このように，専門性や異なる立場を生かした新たな視点を取り入れることにより，より広い視野に立った教育活動の質の改善が進むとともに，チーム学校としての組織的な取組が推進された。

２　今後の課題

「社会に開かれた教育課程」実現のために，この２年間の取組は学校から保護者や地域へと，ホームページや保護者会等で発信されてきた。ＰＴＡ総会で校内放送を使い，学校が目指す姿の共有や家庭への協力依頼を行うなどの工夫が見られた（**図23**）。しかし，新型コロナウイルス感染症対策のため，保護者や地域との連携が十分に行えないこともあった。今後も，学校と家庭・地域が同じ目標に向かい，一体となって児童・生徒を育てていくためには，学校の取組を継続的に発信・共有していくことが求められる。

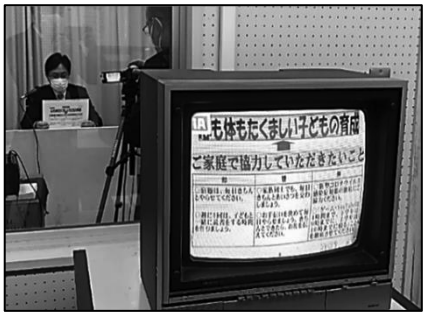


図23　校内放送を活用したＰＴＡ総会

〈参考・引用文献〉

1）小学校学習指導要領（平成29年告示）
（文部科学省　2017年）

2）中学校学習指導要領（平成29年告示）
（文部科学省　2017年）

3）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編
（文部科学省　2017年）

4）中学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編
（文部科学省　2017年）

5）幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）
（中央教育審議会　2016年）

6）学力向上・授業改善・学校改革 カリマネ100の処方
村川雅弘（教育開発研究所　2018年）

7）「深い学び」を実現するカリキュラム・マネジメント
田村学（文溪堂　2019年）